

平成26年9月1日（月）

【基調講演】『里山資本主義のススメ』

講師：NHK報道局 報道番組センター チーフ・プロデューサー 井上 恭介 氏

皆さん、こんにちは。

今回のシンポジウムは、災害復旧からのということで、なぜ私が呼ばれたのかなということ私なりに感じていることから申し上げますと、大変な土砂災害があって、多くの方もお亡くなりになり、今も仮設住宅暮らしをされている方もいらっしゃるということで、本当に大変な努力を払ってふるさとを取り戻すということを、皆さんでされているんだと思いますが、大事なこと、本当に忘れてはならないのではないかと考えているのは、それは何のためにやっているのかということで、つまりはそういう大変な努力を払ってでも、そのふるさとにぜひ戻って、あの暮らしをもう一度やりたい、またはそこでやってきた暮らし、生活が、ぜひこれからも続けていかなければならないものであるという確信、もしくは、都会は都会で豊かだったり幸せだったりするのかもしれないけれども、この地域、この田舎暮らしの中には、都会、東京にはない、いい暮らしや幸せや豊かさというものがあるという確信があってこそ、その地域にもう一度戻ろうと、どんなことがあっても、復旧・復興して戻ろうということなんだと思うんです。今東日本大震災の被災地を含めて、ふるさとでもう一度頑張ろうと、そこにはかけがえのない、そこにしかない高い暮らしがあるんだという確信そのものが、ともすると薄れる、または自信が持てなくなることが各地で起きていて、でも本当はそうではないんだよということを申し上げたいと思います。

本当に負け惜しみではなくて、東京にはない、東京ではすることができない幸せであったり豊かさだったりというものが地方にあるんだということを見つけていって、それが本当に、負け惜しみではなく、どういうことなのかというキーワード探してみたいなことをやってまいりました。私はこの6月に転勤で東京に参りましたのですけれど、それまで3年間広島におりまして、広島で中国地方の中山間地や瀬戸内の島、ものすごい過疎が進んでいるところですが、そこで頑張っておられる皆さんといろいろ一緒に考えて編み出した言葉が、この「里山資本主義」という言葉とそのやり方ということです。

「里山資本主義」とは、何か変な言葉なのですけれども、昔、僕が東京におりましたときに、「マネー資本主義」という番組をつくっておりました。言うなれば、世の中全てのことを金で解決するといいますか、自分の生きていく、生活していくこと全てのことに、お金を払って手に入れるという、今ほとんどの人がやっている資本主義というものがあって、でもそれが、皆さんご存じのリーマン・ショックという、ウォール街にある1つの証券会社が突然破綻し、その1つの破綻をもって、世界中に回っている、または回っていると思われていた大量の膨大なマネーの何分の一かが一瞬にして消え去ってしまうというようなマネーの世界の大システム障害が起きた。それがなぜ起きたのかということを取材していたわけですが、取材していくと、結局、サブプライムローンなどという本来お金が借りられないぐらい貧しい所得の低い人たちに、無理やり住宅ローンを借りてもらって、無理やり借りてもらおうとすると、利率は高くなければならない。それはそうです。なかなか返ってこないかもしれないですから。だけれども、その利率でローンを借りてもらおうと、ローン債権というものが、今度は高利回りの金融商品になりますという言葉のすりかえみたいなことが起きまして、ものすごく危ない、返ってこないかもしれないと思われる住宅ローンをもとにつくった金融商品というものに、世界中のお金が群がって、そこから利益を上げていくというような仕組みが、リーマン・ブラザーズという一つの証券会社がぱたっと倒れたときに、一気に世の中のお金の流れが逆回転をして、世の中に存在していたはずのお金の何分の一かがなくなってしまうというようなことが起きました。リーマン・ショックがマネーの世界の大システム障害とすると、その数年後、今度は東日本大震災で起きた原発事故によって計画停電というものが起こり、東京では渋谷や新宿の町が真っ暗になるという、エネルギーの世界の大システム障害が、一つの発電所の停止によって突然起きた。マネーの世界であったり、エネルギーの世界は、何十年もかけて緻密なシステムを組み、その恩恵に全員があずかって、ほぼ完璧かなと思われていたようなシステムが突然に停止をしてしまうという体験を、我々はこの数年の間に2回しました。

最初の話に戻るのですけれども、今、そういう災害があつて復旧・復興しても、この山の中の地域は、ぜひ住むに値するところであるということ、それからむしろ東京よりも、東京にはない豊かさや幸せがあるんだ、もしくはあるのではないかという思いは、その地域に住んでおられる方はぜひそう思っていたきたいんですけれども、実は世の中の流れとしては、都会に今住んでいる方、地方から出て行って住まれている方、何代も前から住まれている方、いろいろいらっしゃると思うんですけれども、その人たちの中にも大きな

うねりといえますか、そういう考えが実は広がってきているのです。「里山資本主義」という本は、僕も売れた本なんか書いたことがないものですから、本当に自分がびっくりしているのですけれども、今30万部出ています。どこの方が一番買ってるかという、もちろん田舎の方や地方の方も買っておられるんですけども、東京の人が一番買っているのです。東京の普通にサラリーマンされている方が一番買っておられます。「里山資本主義」というある種ブームで、そういう方の中から、「じゃあ今すぐに東京でサラリーマンやめて地方に行きます。」という動きが、目に見えてどうと起きているところまではなかなかいっていませんが、少なくとも、ひょっとすると東京で全てのものをお金で買う、そのお金で買うもののもとがマネー資本主義であり、買うものの一つがエネルギーであり、そこに100%依存している今の暮らしというのが本当にいいのだろうか。むしろ、そういうことの一部を何かに置きかえて、今田舎で、地方でされているような暮らしも取り入れるようなことを考えていかなければならないのではないかというふうにお考えになる方が、都会の中にも実はたくさんいらっしゃって、そういう方の一部が、UターンだったりIターンだったりして、この紀伊半島にも戻ってこられているような方が、今中国地方や四国や九州で、相当な数に上ってまして、これは僕は、この数年のうちに、ある線を超えて大きな流れになるのではないかと、そういう予感を感じているところです。

ですので、ぜひ皆さん、せつかく復旧した紀伊半島の山の地域の暮らしを、どういうところがいいところで、またどういうところは、今のところ弱点なんだけれども、克服していけば、都会の人に、いやこういう暮らしもあるんですよ、なかなかこれはいいもんですよというふうに言えるものになるのかというのを、これから少し申し上げる「里山資本主義」の幾つかのキーワードと一緒に確認させていただきながら、進めていければというふうに思っています。

最初に、いつもご紹介しているグラフがありまして、都道府県ごとの、言うなれば貿易収支みたいな数字があるのです。外に対して売るものが多くて買うものが少なければ黒字になります。売るものが少なくて買うものばかり多ければ赤字になります。都道府県の中で一番黒字なのは、当然東京都ですけども、統計をとったこの年に一番赤字だったのが高知県で、高知県に限らず、奈良県だったり和歌山県だったりも同じような傾向にあるのですけれども、何で赤字なのかというのを内訳で見ますと、石油、電気、ガス、要はエネルギー代を外にいっぱい支払っているわけです。黒字はないかという、農業とか漁業も盛んです。カツオもとれますよね。これらもいっぱい売っているようですけども、

飲食料品、実は食べるものを随分外から買っているのです。これはつまり、生のものを売って、外で加工して買い戻しているというわけです。「なかなか地方だと生活が難しくくてですね。」「なかなか食べていけなくてですね。」という話をみんなよくしているわけなのですけれども、この辺はやはり見直したほうがいいのではないかと。支払っているものが何とかならないか考えたほうがいいのではないかというのが、「里山資本主義」を考える、つまり田舎でも幸せに暮らしていけるという一つの原点です。

高知県に行くと、皆さん「なかなかそうはいっても高知県には油田はないんですね。」というふうにおっしゃるわけですが、エネルギー源はそれだけなんですか。地下資源ばかりなのではないかと。ちょっと後ろを振り返って山のほうを見ると、ものすごい山林があるわけです。これを本当に生かしているのか。山林をエネルギーとして利用できないのかというふうなあたりを「里山資本主義」を考える出発点にしてみたいと思うわけです。

広島におりましたので、主に中国地方の事例ばかりを、番組なり、本では紹介しているのですけれども、当然、このあたりでもいろんなことをされている方がいらっちゃって、それをぜひ進めていただきたいのですが、我々がおつき合いをした中国地方の中の方では、広島県庄原市、中国山地の山の中の、いわゆる田舎に住んでいる方が、先ほど申し上げた身の回りにある木のエネルギー、それを本当に自分たちは使わなくていいのかという運動を数年前から始められました。彼の家裏、まさに家の際から裏山があるのですけれども、よくよく考えてみると、何十年もその裏山に誰も入ってなかった。昔は、炭焼きをしたり、木も製材のものとしてもそこそこ回っていたのですけれども、彼もよくよく考えてみたら、全然入ってなかったと。ここにちょっと入り直そうということを考えました。大体のときは、別に木を切るまでもなくて、スーパーのかごみたいなのを下げて、1週間に1回ぐらい、30分ぐらい、裏山をちょこちょこ歩くと、よく落ちてますよね。枝とか葉っぱとか、いっぱい落ちているわけです。30分ぐらいたつと、そのかごがいっぱいになりまして、そのかごで拾ってきた木の枝だったり何だったりというのを、彼らのグループで開発したエコストーブという、煮炊きをするための熱効率の比較的にいいものなのですが、もともとはアメリカのロケットストーブというドラム缶を改造してつくる同種のものであったのですけれども、日本ではちょっと大き過ぎるよねというので、同じくガソリンスタンドで廃品として手に入るペール缶を組み合わせまして、中には断熱材が入っていたりしまして、雑木をくべますと、大体夫婦の1日分の御飯が炊けます。それを毎日やって

いますと、光熱費として、月に2,000円ぐらいは節約できるということです。この2,000円が高いか安いということなのですからけれども、彼は、これはもう運動としてやっているんだと言うのです。それは、運動はどういう意味かということ、先ほどの話です。エネルギーは今、全部お金を出して買わないと、外の専門にやっている電力会社とか石油会社とか、そういう業としてやっている人たちから買うことになっています。でもそれは、今の時代でも絶対買わないといけないのかということ、彼は問いかけているんだと言うのです。

少し前までは、生活の中のものは、特に田舎であればあるほど、エネルギーだとか食べるものとか、自分で賄ってたわけですからけれども、それが戦後の高度経済成長時代の経済の仕組みというものが、世の中全体に行き渡るに連れて、どんどんどんどん誰か専門にかわりやってくれる人からお金を出して買い取るということに、どんどん切りかわってきているわけです。そうすると、どんどん支払うためのお金の額が上がっていくわけです。そのために、いっぱいお金を稼がないといけない世の中になっているわけです。いっぱいお金を稼ぐということについて言うと、東京のほうが地方よりも有利なので、みんな東京に出ていくんです。では地方では、本当に全部が全部、お金を出して買わないといけないのだろうか。今までお金を払っていた分を、少しでも減らしていけば、案外地方でも…。収入というのは、お金の額のことだけだと、今何となく僕たちは信じ込まされていますけれども、お金を払わなくても手に入るものが十分幸せのもとにはなるわけです。エネルギーはその一つだということなのではないかと。先ほどの方の場合、もう70何歳ですから、エネルギーのことはエネルギー会社に全て預けて、そのかわり一日中集中してやらないといけない仕事というのは、残念ながらそんなにはありません。その余暇みたいな時間を使って山に入ると、それはそれで汗を流して楽しいんだよと。それを使って御飯を炊くと、これはこれでまた楽しいしおいしいんだよと。しかも、光熱費は、やったらやった分だけ、その分、業者から、自分の手に取り戻すことができるということで、こういうことをエネルギーにせよ、食にせよ、いろんなことでやっていけば、地域のほうがやれることがあって、払うお金が少なくなった分だけは豊かになれるということになるのではないかと。ちなみに申し上げますと、「里山資本主義」を読んでいた方はご存じですが、この方の場合は、お中元というものも決して買いません。我々は、デパートに行って、ハムの詰め合わせなんか買って送るわけですからけれども、彼は自分の畑に行きまして、収穫する1週間か2週間前のかぼちゃにお中元で送る人の名前と、それからありがとうとか、

一言、くぎとかきりとかで傷つけるんです。1週間ぐらいたつとそれが浮き上がってきて、特別のメッセージつきのカボチャになりまして、それをお中元でみんなに送ります。ですから、宅急便ぐらいはかかりますけれども、原価はタダ。送りますと、あちこちからそうめんやら何やら、いっぱい送られてきまして、そういったことでもお金を使わずに、身近なものを使って、実はお金を払ってやること以上の満足感みたいなものが得られるものを提供しているそうです。

ちなみに申し上げますと、この方がいつも来た人に言うエピソードがあるのですが、あるとき、友達がやってきて、その友達が言うに、前の日に家電量販店に行って、薪のように炊ける炊飯ジャーを8万円出して買ったというのです。その翌日にここに来たら、まさに薪で御飯を炊いている人がいた。いや悔しいな、ちょっと炊いて見せえやと言って、炊いてもらって食べたら、薪のように炊ける炊飯ジャーよりもおいしかった。いや、悔しいな悔しいなと言って、このエコストーブ1つ下げて帰りましたというエピソードを、いつも語っているのですけれども、何かそういう時代になっていると皆さん思いませんか。家電量販店に行って、炊飯ジャーなんか見ると、軒並みそんなこと書いてありますよね。羽釜のようにとか、土鍋のようにとか、薪のように炊けますとか、もともとまきで炊きたくないから炊飯ジャーの世界に行ったと思われるのですけれども、いつの間にか、そういうことになっているのだと思うんです。これも一つの今の時代の節目としては、そういうところに来ているのだと思うんです。こういうことを進んでやっておられる方は、みんなで懐かしい未来という言葉をよく使われます。未来というと、僕たち世代だと、鉄腕アトムみたいな世界というか、どんどんロボットがいろんなことをやってくれて、超高速鉄道ばかりが行き交って、すごい超高層ビルが建ってみたいなことを想像しましたがけれども、技術や科学も行き着くところまでいろんなものに行き着いて、もちろんもっと速く走る高速鉄道は今開発されているわけですが、特に生活に近いものでいうと、あるところまで行き着いて、それよりも高い質のいいものを手に入れようとする、実は前の時代にあって、そのころはちょっと不便だったから嫌だなと思っていたのだけど、でもみんな覚えているわけです。まきで炊いた御飯がおいしかったことは。あれを今の最新技術を使ってやる。つまり、未来だけど、達成しようとする、目標とするものは、実は前の前の時代の懐かしいものであるというような時代に、多分差しかかっているんだと思うんです。いろんな世界がそういうふうになっています。さんざんガスコンロを開発した結果、備長炭に戻るみたいな世界です。

そういう意味でも、都会の人たちにとっては、地方の暮らし、地方が守り続けてきた、「何周か遅れのトップランナー」という言い方よくされますけれども、本当にそうで、今進んだところにどんどんどんどん行った結果、懐かしいあの時代のことを取り戻したいのだよというようなことが、時代の最先端に来ているのです。

ついでに言うと、このエコストーブは手づくりでできるのです。結構熱効率のいいものができるのですけれども、震災の後、最近では里山資本主義ということもありまして、講習会を開くと、いろんところで僕もつくってやりたいという人がふえています。熊本で、出張でエコストーブづくりの講習会をやりまして、みんなで1つ作って、作りたてのやつで何かを焼いたり、お米を炊いたりして食べて、みんなで奇声を上げる。大体決まって、「これで皆さんは、グローバル資本主義の奴隷から、一部ではあるが解放されました」「おお」とかいうようなかけ声をかけて。特に東北の被災地では、このエコストーブをつくって、何千円の世界からかもしれないけれども、入らなかった裏山に入って、エネルギーは絶対にお金を出さないと手に入れられないんだという思い込みを捨てて、自分のやることからやろうじゃないかみたいなことが、全国に今じわじわと広がっています。

熊本の方は、月3,000円とかの世界だったのですけれども、もうちょっと大きな規模で目の前にある使われてない資源を生かそうではないかということをやっているのが、我々がいつも取材をさせていただいている岡山県真庭市、中山間地の真ん中にあるところで製材所を経営している方です。製材所では、丸太を買ってきて製材して出すと、ざっと半分ぐらい木くずになってしまうわけです。その木くずを捨てると、産業廃棄物という扱いになるんだそうでした、引き取ってもらうと年間2億円ぐらいかかるんだそうです。しかしそれは本当にごみなのかと、あるとき常々感じていた疑問を形にしたということです。ちょうどバブル崩壊の後、住宅市況が悪くなって、製材所の経営も、それまで黒字だったものが赤字になりというときに、銀行にさあどうするかという相談をされたそうです。銀行の方は、設備投資をなさって生産力を増強したらどうですか、または出している製品の数を、種類をふやしてみたらどうですかとおっしゃったのですけれども、その銀行の方を説得して、この木の発電所をつくりました。製材工場ですので電気をいっぱい使うわけです。そうして発電しますと、年に1億円かかっていた電気代がとりあえずゼロになりました。夜は製材所をやっていませんけれども、発電機だけは動きますので、その分は電力会社に売電をしますというので、これで5,000万円ぐらい収入として入っているそうです。先ほど申し上げたごみ代2億円がかからないことも合わせて言うと、ざっと3

億円とか4億円の分、経営がよくなるわけです。売るものは全然変わらなくても。売り上げのことばかりを今の経済は言うんだけど、払っているもののほう、支出のほうを見直すと、随分地域経済というのはよくなるのです。

実は、それでも木くずは使い切れませんで、さっきのこういうのでおがくずの粉が出てきますので、それを固めてペレットというのをつくりました。これペレットというのになると、外に売って、外でも木のエネルギーを使えますということになります。このころから、真庭市も一緒になって取り組みを始めまして、市の施設とかで、いろんなところでこのペレットで燃料というものに切りかえていこうということを進めています。最近建った真庭市の市役所の庁舎があるのですけれども、そこには、このペレットのボイラーと、それからもう一つ横にはチップの、木を砕いただけのチップのボイラーと2つ設置して、それで真庭市庁舎の1年間の冷暖房全てそれで賄っているそうです。火を燃やすのに冷房もできるんですね。本には詳しく書いてありますので、読んでみてください。

町の中でも、ペレットを使う人が増えてきて、真庭市内で、ビニールハウスでトマトなどを作っている専業農家の方は、重油とか灯油のボイラーを、数年前にペレットに切りかえました。彼がおっしゃるには、2つの意味で物すごく経営が安定するようになったと言うのです。1つは、燃料代が安くなりました。それはどういうことかという、20年ぐらい前に石油のボイラーをつけたのですが、そのころは石油は安かったのです。でも、その後、皆さんご存じのように、石油高騰の時代になって、もう今は高いままそこから下りてきません。昔だったら、石油のほうの方が便利だしみたいなことだったかもしれませんが、今はペレットのほうの方が圧倒的に安いそうです。もう一つ、ただ安いだけではなくて、価格が乱高下しない。しかも価格決定者が身近なところにいるということが、経営的にはすごく安定して安心だということを言っています。石油ですと、結局価格は国際的な石油の原油市場という相場に委ねるわけです。そこから連動的に身近なところの石油の価格も決まります。これは、必ず上がったり下がったりします。一定ということはありません。それはなぜかという、そこには結構、石油とは直接関係のない投資家とか投機筋が入っていますので、どういうことかといいますと、投資家とか投機筋とかという人は、別に石油が要るから買っているわけではなくて、上がったり下がったりする差額のところでお金を投じてもうけるわけです。低いときに買って、高くなったときに売ったら、それはそれでわかります。高いときに空売りというのをやります。売ったことにするんです。下がったときに、それを買い戻すと、それはそれでまた儲かります。でも、そういう



ふうになってくれないといけないという人がいっぱいいるものですから、必ず乱高下するわけです。でも、そのことは農家の方にとってはものすごくマイナスです。トマトを植えたときに、大体これぐらいのコストだろうと思って計算をするわけです。その中には燃料代も入っているわけです。そう思っていたら、それがこんなことやっているうちに上がりましたということになると、せっかくトマトが収穫期になってというときに、もうけゼロということになるのです。実際、そういうことが起きたそうです。そのときに、ハウスの温度を試しに1度下げたら全滅したそうです。そういう体験をしている者からすると、ペレットはその製材所がやっているんですから、乱高下とか、そんな面倒くさいことはやらないわけです。ずっと安定しているわけです。しかも、その価格を決める人がそこにいるわけです。もちろん、「すいませんけど15円に下げてくださいませんか。」と言って、すぐ下げられるかどうかは知りませんが、グローバル経済のことというのは、大抵のことが自分の手ではどうしようもないところでいろんなことが決まってしまう。特に価格については。そういう経済が常識的なところで、身近なところに決定権を取り戻せるというのは、とても地域経済にとっても安定、安心であるというふうに、彼の実感を聞いてみると、僕たちも思います。別に電気やガスを使うなど言っているのではないんです。便利なものは使えばいいと思うのですけれども、そのうちどこか、身近なところで、本当は自分でできることはないのだろうか。地域のものを使ってやれることはないのだろうかということに置きかえていくと、それはその分だけ安心もふえていくということなのではないかなというふうに思っております。

先ほど申し上げた懐かしい未来なのです。では、その木のエネルギーをもう一回使い直そうというときに、大体皆さんがおっしゃるのが、「そうはいっても木のエネルギーって不便だしね。手は汚れるし、釜で御飯炊くとおいしいけど、寒い朝に起きてやるのつらかったよね。」というような、つらかったときの話を皆さんされるんですけれども、そういうことは、こういう木のエネルギーを使いましょうみたいなことが世の中の的に進んでいくと、先ほど申し上げた懐かしい未来をつくり出そうという技術開発によって、意外に近代的なものに更新することができるということなんだと思っています。

番組でも取材しましたオーストリアの事例なのですけれども、オーストリアは木のエネルギーの利用が大分進んでいまして、それがどんどん加速度的に進んでいるものですから、いろんな技術が開発されているのです。ちなみに申し上げますと、その前は何を使っていたかという、一番使っていたのはロシアのパイプラインの天然ガスなので安定しな

いわけです。安定しないというか、政治的な理由でとめられたりするものから、山の木を切って、そこに計画的に植樹をして、エネルギーを安定的に使いますというほうに、どんどん切りかえていっているわけなのです。どういう技術開発かという、例えば、ペレットを運ぶタンクローリーです。タンクローリーというと石油ではないかと思うのですが、ペレットというのはちょっと空気圧をかけるとざあっと動かせるものなのです。製材所でタンクローリーに詰めまして各家を回ります。各家を回ると、各家の庭のところの地下にペレットを入れておくタンクがあります。そことタンクローリーの端っこを、石油と同じようにホースをつなぎまして、ガチャッとスイッチを入れると、多少の空気圧がかかるのでしょ。ざあっと入っていきます。実は、ホースは2本ありまして、もう一つのホースからは、底にたまった灰をタンクローリーの中に吸い上げます。しゃあっと。全然手が汚れないのです。そのペレットを使って、一冬分の暖房と、それからお湯が、セントラルヒーティング方式で使えるという仕組みをつくり出しているオーストリアの村もあります。その話をすると、そんなことをここで言われても、ここでは当分進まないよと思われるかもしれないのですけれども、このオーストリアがこの仕組みに向かって本格的に動き始めたのは、たかだか15年ぐらい前のことです。ですから、15年たってみると、先ほどの方に言わせると、いつもオーストリアに行って、新しいことを勉強してかえってきて、日本でも応用するけれども、オーストリアの背中が年々遠くなっていくという言い方をされているぐらい技術開発はどんどん進んでいて、逆に言うと、技術開発できることはいっぱいあって、そういう恩恵を享受できるようになると、あながち木のエネルギーで山間地域のエネルギーが相当部分できていくという時代も、そんなに絵そらごとではないのではないかなというふうに思っています。

ちなみに申し上げますと、先ほど申し上げた岡山県真庭市の場合、去年市長さんが、元京都府副知事の太田さんという人にかわりまして、この人がまたものすごい感じでいろんなことを始めておられるものですから、先ほどの中島さんたち民間と一緒にしまして、真庭にもともと工業団地用に造成したけど、全然使われていない土地がありまして、そこで1万キロワットの木の発電所をこの間建て始めました。これを2基つくるそうなのですが、5年ぐらいでできるように頑張っているらしいのですが、2基できると、真庭市は5万人ぐらい市民がいるのですけれども、この5万人分の電気、電力は全部賄える計算になるのだそうです。ですから、木のエネルギーの話をすると、そんなこと言っても、こんなにでっかい日本経済が木のエネルギーで全部置きかわったら、日本中がまたはげ山にな

ってしまうではないかという議論がありまして、僕もそうだと思います。別に、海沿いの製鉄所がみんな木のエネルギーを使わなくてもいいと思うのですけれども、少なくとも、山の中で周りが木ばかりというところに暮らしている市町村が、このことに真剣にやらない手はないんじゃないかなと思うんです。

後で話すことなのですが、周りに木はいっぱい生えているんだけれども、石油のタンクを持って、近くのガソリンスタンドに灯油を買いに行くみたいなことを、今までずっと続けてきたわけですが、その石油は、遠いアラブの国で掘って、タンカーに乗せてどこかの港まで来て、そこでタンクローリーに詰めかえて、山道に来て、そのガソリンスタンドまで来ているわけじゃないですか。物すごい輸送費だけでも無駄だと思うのです。別に石油会社に恨みはないんですが。

もう一つ考えないといけないのは、払ったお金が、一見、灯油代として払うのもペレット代として払うのも、何となく同じようにお金払っているようなのですけれども、石油代で払ってしまうと、それは最終的にはアラブの王様のところへ行ってしまいます。手元には全然残らない。その分だけ、また新しく稼がないといけないのですけれども、逆に、ペレット代として払うと、そのお金は近所の製材所に行くんです。そうすると、地域にお金が残るのです。とどまるのです。ですから、ペレット売って儲かったと言って、その製材所の皆さんが、近所でまた飲むと、またそれが地域の中で回っていく。地域の中のものを使うと、単にそれが安心だということを超えて、地域の中に回っていくお金の量が、額が、どんどんふえていくということなんです。外のものを使っていると、どんどんどんどん逃げていってしまうということ、あわせて申し上げておきたいと思います。これも「里山資本主義」でやっている極めて重要な概念というか、心に留めておかないといけないキーポイントだと思っています。

ついでに申し上げますと、オーストリアで我々の仲間が取材してまいりますと、オーストリアの木のボイラーを開発しているメーカーに行くと、やっぱりおもしろいことを言う。

「木から取り出すエネルギー効率、同じ質量からどのぐらいの熱量を取り出せますか。」という、エネルギー効率がぐんぐん石油に近づいていって、超えるぐらいまで来ているんだというようなことを教えてくれた。すごい勇気の出る話ですね。どういうことか聞くと、石油は、この何十年かずっと一生懸命技術開発をしてきました。一方、木のエネルギーのほうは、ヨーロッパ、オーストリアでも同じことで、ある時期に一旦とまって、ずっと技術開発しないまま何十年か来ているので、最近技術開発を始めると、伸びしろがいつ

ばいあるらしいのです。ですから、ほぼ頭打ちになるぐらいまでどんどん開発してきた石油に対して、今急激に追いつくところまで来ているんだと。石油のほうが何となく便利なだけじゃなくて、エネルギーがたくさん出そうな、ガソリン自動車より木炭自動車がと言っていたが、何かそうでもなかったようなとか、何となく思い込みがありますけれども、やっぱり木のエネルギーもまだまだ技術開発の余地があって、それをやっていると未来が開けてくるということだと聞かされました。これは、日本がやるべきことではないかなと。技術開発は、日本の物づくりが一番得意としていることですが、真庭のように理想的な形で動いていくというのは、なかなか難しいのはよくわかっています。とはいえ、各地でそこそこ始まっているのだと思うのですけれども、こういった流れが動き出してくれば、日本の持っている高い技術開発力も貢献していくのではないかなというふうに思っております。

エネルギーの話ばかりをしてきましたが、木がいっぱいあるところなので、木の話と比較的多めにしていたのですけれども、当然のことですが、農業の世界とか食べ物の世界でも、里山資本主義はいろんなことを考えてきました。ある種、これまでの経済、これまでの市場の常識の逆を行くことで、実は地方のほうがうまくいく、または地方のほうが強いというふうな事例を見つけました。その代表例が、山口県の周防大島という、瀬戸内に浮かんでいる島でやっている、ミカンの島なのですけれども、ミカンなどを使ってやるジャム屋さんの事例です。

周防大島町は、合併して幾つかの町から成ったのですが、そのうちの一つの町は、最近までの20年ぐらいの間、日本で一番高齢化が進んでいる島でした。ミカン産業はなかなか思うようにいかず、産地間競争やアメリカのオレンジなどで、ミカンやっても食べられないよという話が常識的になり、若者たちは外に出て行って、高齢化が日本で一番高いところだったのですけれども、そうやってたミカンを使ってジャムをつくと、案外このジャムが島の経済にどんどんいい影響を与えています。

始めたのは、もともとは電力会社の社員をされていた方でして、何かよくできてるなという感じなんですけど。新婚旅行でパリに行きまして、奥様がパリのアクセサリ店に入っている間に、あんたちょっとその辺で暇潰してなさいよと言ったときに、隣りにあったのが、パリのおしゃれなジャム屋さんだったと。そこに入って、ジャムの瓶を眺めていたら、彼が今つくっているような、ちょっと洋酒を加えていたり、手づくりのおしゃれなジャムの瓶がいっぱい並んでいて、俄然興味が湧いてきまして、ジャムを30個ぐらい

買っちゃったと。アクセサリィ店から戻ってきた奥さんに、あなた何すんのか言ったら、これはお土産だといって持って帰って、最初は本当はお土産のつもりだったのですが、家に帰って、表に書いてある名前などを、フランス語の辞書を引きながら読んでいるうちにますます興味が湧いてきて、30個全部自分で食べちゃったと。食べ終わるころに、俺はジャム屋をやると言い始めまして、奥さんと大げんかになったそうなんです。この奥様の実家が周防大島で、そこはミカン農家なんかがいっぱいあって、近くで仕入れられるということがあって、最初は、この方は京都の出身で、パリの店みたいに京都の町屋でやるのもいいかなと思ってたんですけど、やっぱり原料にこだわったほうがいいんじゃないかなという思いもあって帰ってきました。

そして、地元の農家を回ると、その農家の人たちの中に、残念ながら、ミカン産業として、ミカンを出荷してということではなかなか強みとしては発揮できなかったけれども、ジャムをやるということになると、使える知恵がいっぱいあったというのです。これは外から、松嶋さんみたいな外の目が来たことで、それを発見していくわけです。話の中で、実はミカンというのは、熟す前の青いころには、そのときだけミカンが発する虫を寄せつけない強い香りがあるんだというふうなことをミカン農家が雑談で言うわけです。ああ、それ使えますねという話なんです。じゃあ、そのジャムをつくろうと。青いときのミカンを生入れてきて、青いミカンのジャム、独特の香りがするジャムができました。これはヒット商品になりました。もうちょっと熟してくると、普通にミカンですから、それはそれでおいしいミカンジャムができますと。もうちょっとまた雑談していたら、このミカンね、もうちょっと木になったままにしておくと、それはそれでまたちょっと味も香りも変わるんですよという話になるんです。よく柿とかが木になったまま半透明になったりよくしてますよね。ああいう感じのことです。木になりっ放しのミカンを生入れようと都会で思うと、大変なんですけど、田舎の場合は絶対買いますからそのままにしといてねと言えば済むことなので、ちょっとずつ違う時期にちょっとずつ違う香りやら味のミカンジャムを、時期を区切ったり、ちょっとずつ工夫を変えたりするものですから、1種類につき30個から50個ぐらいしかつくれないというか、つくらないんですけれども、次々とミカン農家の知恵が入った地域ならではのジャムというのをつくっていく。これが、ことごとく今までの経済でいうところの大量生産、できるだけ大量生産をして価格を下げて、それを競争力にして市場で勝っていくというのとは真逆だけど、実は地方でやると強いということになるんだというふうに、彼は分析していて、これはいろんな地方で、「里山資本主

義」の強みとしてやれるなということとして聞いてきたんです。

それは、どういうことかといいますと、大体地方で起業されたような方でも、いつかは大きな工場をつくってというようなことをよくおっしゃるんですけど、それはやめたほうがいいという話なんです。大きいことはいいことだというのは、ちょっと前の時代の経済の常識でして、今は、先ほどのエネルギーの話でも一緒なんです。大きいことをやる人が、ほぼ完璧な形であまねく人々に行き渡るようにものをつくり出すというのが、むしろ当たり前前の時代になっているわけです。ジャムでいえば、例えば明治製菓みたいなところが、どこのスーパーの棚に行っても、同じ品質の、しかも安いジャムはもう提供してくれているわけです。本当に、ジャムが足りませんという時代から、それぐらい大きなところがちゃんとやってくれる時代になったそのときに、そういう小さいことはいいことだという戦い方が存在するということです。彼らのジャムは、少ないこと、それから味が一定にならないことを、全部売り物にしていきます。たくさんものがある時代には、ビンテージみたいな価値になるんです。ビンテージものというのは、少ないから価値が出るんです。このジャムもいっぱいないから、そんなん高いから買わないわと言ってるとすぐ売り切れちゃうんです。ですから、みんな競って買うみたいなことになります。味や品質が一定でないことも、それは手づくりであるからとか、地元の素材にこだわってるからとか、そういうストーリーを伴っているので、大体品質は一定でないといけないんだと、キュウリは絶対真っすぐでないといけないんだとやってますけれども、実はそういうことがあまねく当たり前な時代になればなるほど、そういうちょっとずつ違ったりするようなことをわざとやっているようなことが高い価値になるのです。このビンテージの考え方は、あらゆるところに応用できると思うので、ぜひ皆さんされたいと思うんです。

こういうふうなやり方をしていると、1瓶500円ぐらいするんですけど、しばしば行っていっぱい買っちゃうというはめになるんです。ここに実例が一人おられます。大体、行くと店先に、お二人のうちどっちかがいらっしやって、もう一カ月ぐらいすると次はブルーベリーですかねとかささやいてくれるんです。また、来なくなっちゃう。季節感のままにジャムをつくっておられて、つくったジャムをどんどん売り切らせていってしまうので、冬はミカン、春はイチゴ、夏はブルーベリー、秋になると、東和金時というこの辺だけでできる固有種のサツマイモがあるんですけど、そのサツマイモの芋ジャムなど、一年中、先ほど申し上げたような、ちょっとなり過ぎたみかんなどが、全部種類になって並んでいくものですから、僕なんか、ひっきりなしに行くはめになっちゃうんです。

リピーターがこういうふうに来るというのも、こういう形でないとあり得ないですよ。なくなったらスーパーに行って明治のジャムを買うというようなタイプのことだと、しばしばこのジャム屋さんに行く理由はなくなっちゃうわけですけども、行くこと自体が楽しかったり、スーパーで売っているジャムはお土産になりませんが、ここのジャムはつけ加える話満載ですから、どこへ行くのにもお土産になりますので。この間、転居先のマンションに全部ジャムを配って歩いたんですけども、そういうふうなことにもなる。今申し上げたように、大量生産で価格を下げる、品質は一定のほうがいいんだ、業態としても大きくなればなるほど強いんだということが、むしろ世の中として行き渡った時代に地方は個性を発揮すべきなんです。それぞれの地方にそれぞれちょっとずつ違う個性があるはずで、その個性を売り物にしていくと、実は都会からこういうばかみみたいな者が足しげく通うという、人の流れも生み出すことができるわけです。

この循環する経済というのは、先ほど途中で申し上げていた、同じお金を払うのでも、地域産のものを買うのと、県外産とか外国産のものを買うのとでは、実は全然経済効果が違うということをもう一度確認したいと思っています。そのことの事例を2つほど持ってきたのですが、1つが、あるこれも広島県庄原市の高齢者や障害者の福祉施設を幾つも経営している方が、施設で使う食材を、それまでは市場から調達していて、できるだけ安いものをと、結局県外産とか外国産になっていたものを、実は、デイサービスで来ているおばあちゃんたちは、家でいっぱい野菜を自分用につくっていて、自分はなす1本ぐらいしか食べないので、残り全部腐らせてたということに気づいて、それを集めて、施設の食材として使わせていただくということを始めました。これで施設の食材費は1割ぐらい減ったそうです。お年寄りたちは、「ただでいいんですよ、だってもともと食べてなかったんですから。」とおっしゃるんですけど、とはいえ、一応お礼はするというので、デイサービスのときや、福祉法人で経営しているレストランで使う地域通貨を何枚かお礼に差し上げるということをしました。そうすると、デイサービスへ来ている高齢者の方々が、みんな生きがいができたといって、どんどん元気になっていくという現象も副産物として生まれています。友達を誘って、何年か前にご主人を亡くされて、普段は広い家にひとりで住んでいるものですから、もう話し相手がなくて寂しくてしょうがない。畑に出るのも、畑の横を通る人とおしゃべりするのが楽しみで畑に出るといぐらいの方なのですが、やっぱり地域通貨が手に入ったので、お友達を誘ってレストランへ行きましょうよみたいなことが始まっています。そうすると、かぼちゃのグラタンかなんかが運ばれてきて、「こ

これは〇〇さんからいただいたかぼちゃでつくったグラタンです。」とか言うと、お友達がみんな「はあ。」とか言って、〇〇さんは鼻高々で、帰りには、じゃあお勘定ですねということになると、〇〇さんが、「ここは私が。」と言って、また鼻高々になって。単にデイサービスに行ってお世話されているばかりじゃなくて、自分も世の中の役に立ってるし、そこでもらった地域通貨みたいなもので、またお友達の中でも自分が一定の地位を得ているというふうなことが、使っているのは、ですから地域の捨ててた野菜と、それからそれを育てているお年寄りと、あるものを使っているだけなのですけれども、でもそのことを徹底的に何か役に立っていただく方法はないのだろうかと考えると、金銭的にもいいです。先ほど申し上げた循環経済としてもいい。それから、人間としてのお役立ち感というか、この社会にいて役に立ってる感みたいなものもふえていくといったことが、一つの試みによってできましたというようなことです。

今、岡山の真庭の人たちや、いろんな地域の製材所で、何とか日本の木材を、山の木がなかなか動かないという状況を動かしたいというので、CLTというのをやれないかというので、国も働きかけて、大分国は、今の農林水産大臣はやりたいと言っていて、このCLTというのは、要は木を直角に何回か張り合わせていくというだけのことなんですけれども、これもオーストリアである製材所が開発したものなのですが、これをすると、七、八階建てのビルが木造で建っちゃうというすごい強度が生まれることが発見されていて、これでオーストリアで建っているビルは鉄骨とか鉄筋入ってないんです。だから、ビルは鉄筋コンクリートじゃないといけないというのも、思い込みだったのかなみたいなことです。オーストリアのあるアパートでは、木でつくった住宅ですから、住むにはいいわけです。結露なんかも少なかったり、冷暖房費も安かったりして。隣のイタリアでもやりたいという話になって、日本の耐震実験施設で耐震実験やったら、阪神・淡路クラスの震度を加えても全然大丈夫だということです。イタリア北部は結構地震があるところなんですけれども、どんどんこれで建てています。今、日本の建築基準法ではビルとして建てる場合は、3階建て以上はできないことになってるのですけれども、こういうことが進んでいけばいいのではないかな。今目の前にあるあの山林の、もう伸びきるほど伸びきったあの立派な木材が、そういう形で建材として使えてくると、木くずもいっぱい出てきますから、木くずで発電をして、発電は発電で地域のエネルギーだよ、材木は材木で地域の経済だよというふうに回っていかないかなというのを、今、一生懸命されている方がいらっしゃるの、我々もいろんな進展があるたびに報道しながら応援しています。



どうでしょうか。今の奈良県の南部、紀伊半島のあたりでやれること、または同じことではなくても、発想として何か考え出せること、幾つもあるんじゃないかなと僕は思っています。ちなみに申し上げますと、私はこの間、広島から東京に転勤してまいりまして、全国どこでも取材ができることになりましたので、ぜひ皆さんで始めていただいて、私にもこんなことやってるんだよとご連絡いただきましたら、全部行けるかどうかわかりませんが、ぜひ放送でもご紹介をしたりしながら、これからそういう里山と言われる地域の振興を、僕たちも応援していきたいと思っております。

きょうはどうもありがとうございました。